
失恋専用車両1

空気 田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋専用車両1

【Nコード】

N41960

【作者名】

空気 田

【あらすじ】

高校1年生になった僕。幼馴染にフラれた僕。都市伝説ではなかった失恋専用車両に乗った。色々な人と出会った、とある夏の一日。

1 車両目（前書き）

始めまして。空気^{そらぎ} 田^{でん}と申します。
生まれて初めて書いた小説です。

拙い文章ですが、最後まで読んで頂けたら幸いです。
誤字脱字等御座いましたら、遠慮なく御指摘下さい。

1 車両目

失恋専用車両

登場人物

超（主人公）

しゃしょさん（車掌）

いそやまさん（酔っ払いのOL）

森くん（フリーター）

バツハさん（太った自称ピアニスト）

現在ココ（一見無口そうな銀髪な女子高生）

モノローグ

「ごめん…ごめんね」

彼女の口から出たその言葉を、

「超君とは……付き合えないよ……」

彼は暫く、受け止める事が出来なかった。

「う、うん……」

彼は僅かに俯き、呟いたが、

「そっか…そっか……悪いな！部活の最中に！」

直ぐに顔を上げ、飄々とした態度で頭を掻いた。その表情に失意の色は浮かんでいなかった。

「あー…もう行くわ…じゃな！」

彼は彼女の元を離れた。何も聞かずに。

「…今のままじゃ…無理だよ…」

彼女がそう呟いたのも知らずに。

フラれた。

そう、この事実が高校１年生である僕にとって、如何に重大であるかなんて、多くを語る必要は無く、「フラレタ」とたった４文字を口にするだけで、恐らく家族友人達は僕を慰めるか、又は揶揄する筈だ。後者が多数を占める可能性は否定できないが、下手に慰めてもらうよりはマシだ。だからと言って、慰めを全く必要としていないかと聞かれたら、答えはＮＯだ。好きな女の子にフラれたのだ、傷付かない訳が無い。ダイヤモンドでも傷が付くだろう。しかし、泣く程でも無い。じゃあ慰めはいらないじゃないか！、と心中で禅問答を繰り返し、確実に情緒不安定への道を歩んでいる僕が告白した相手の女の子は、そう、幼馴染である。もう一度言おう、幼馴染である。

僕と幼馴染は同じ病院に生まれ、家は隣同士。幼稚園、小学校、中学校、高校生と全て同じな上に同じクラスであった。ちなみに言えば、席は殆ど隣同士であった。

一蓮托生という４文字熟語を絵に描いた様な間柄で、忖度が聞いて呆れる程にお互いの事を理解しているつもりだった。

だから、僕は子供の頃から、幼馴染とずっと一緒に居るものだと思っていたし、大人になったら結婚すると信じて疑っていなかった。そのおかげか、「恋愛」という２文字に疎く、恋心がどんな心なのかを考えた事も無かった。この事を家族友人に吐露した事は無かったが、聡い彼らは僕に恋愛相談を持ち込んだりはしなかった。持つて来られても、解決は出来なかったと思う。

そんな訳で、僕は恋愛話に花を咲かせている友人達を遠目に見ては、「大変なものだねえ。最近の若いもんは。のうばあさん」と祖父の真似をして幼馴染に語りかけた事が何度かあったが、笑顔を見る事は無かった。ばあさん呼ばわりした事が気に食わなかったのだろうか。一度だけ聞いてみたが、猛禽類の如く睨まれたのは記憶に新しい。

兎にも角にも、僕は幼馴染との将来を天動説よろしく信じていたのだが、違った。地球は廻っていた。それも物凄い速度で。

今の今まで中心に居て、友人達の恋愛に傍観を決め込んでいたプトレマイオスは、地動説を唱えるコペルニクスに吹き飛ばされたのだ。

なぜ？

なぜ、僕はフラれたのだろうか？

子供の頃、なんなら胎児の時から一緒と言っても過言ではない程、昔から一緒に居たのに。一緒になるべきなのでは無いのだろうか？幼馴染とは得てしてそういう間柄なのでは？

という事を、家から今歩いているサンロードという名の付いた商店街に着くまでの間、僕は考えていた。

時刻は午前4時23分12秒だった。日付は7月5日、曜日は月曜日である。一介の高校生がこの時間に出歩く事は殆ど無いだろう。それではなぜ、僕がこんな時間に商店街歩いてるかと言うと、ただ単に全く寝付けなかったのと、学校に行くのが怖かったからだ。

当初、幼馴染に告白をするつもりはなく、自然に男女との関係が築かれると思っていた僕だが、友人達に半ば唆され、多くの人たちが見ている前で、敢えて告白をしたのである。フラれる訳が無いと高を括っていた頃が懐かしい。そして、何と愚かな事をしてしまったのだと、僕は身を震わせた。「ぜってーフラれねーから！」と吹聴していた訳では決して無いが、間違いが明らかになったプトレマイオスを待っているのは、辱めである。優しい友人達に、優しく辱められるのは目に見えていて、ともすれば号外として刷られた

学級新聞が配布されるかもしれない。それが舞い散る正門を、ほうほうの体で通り抜けたとしても、教室で待っているのは容赦の無い辱めである。「あつれ〜？地球は廻っていなかったんだっけ？」、「ヒヤッハー！そんな訳無いじゃーん！」、「ギヤハハハ！」、「そんな優しい友人達の言葉に、僕は耐える自信が無い。

気がつけば、吉祥寺駅北口前に来ていた。

交番の前を通ると、職務質問をされるかもしれないし、根掘り葉掘り徘徊の理由を聞かれ、最悪フラれた事を吐かなければならない。二重にも三重にも自分を傷付けたたくない僕は、交番が無い方から駅構内に首尾よく入ったのだ。

そして、僕は、駅構内に並ぶ6台（内2台は定期券券売機）の自動切符券売機、右から2番目の前に立った。

其処に、全財産である1万円を入れると、液晶画面の一番右下に、普段なら「1480」までしか表示されない筈なのだが、「10000」と本当に表示されたのだ。

都市伝説、とまではいかない武蔵野市伝説があった。もしかしたら、それよりも規模が小さいかもしれない。とにかく、伝説があった。

失恋した人間が、吉祥寺駅構内に並ぶ右から2番目の自動券売機に1万円を入れると、ハートマーク型の切符が購入出来る。そして、午前4時44分44秒に、吉祥駅3番線下りホームで電車を待っている、カメラを持った夫と甲高い声で笑う妻という二人組み芸能人よろしくなピンク色をした201系が、先頭車両1両のみでやってくる。

そんな噂を何処で聞き入れたのか、今となっては思い出せないが、そんな事はどでもいい。

僕が立っている場所から少し上を見上げれば、其処には電光掲示板があり、「3番線（快速）三鷹・国分寺・立川・八王子・高尾」と記されている。通常なら、電車が来る電光掲示板には、「間も無く

電車が参ります」とLEDで文字が表示されるのだが、今は違った。其処には、ピンク色のハートマークが表示されていた。

「え？」

僕は思わず声を漏らしてしまった。そして、辺りを見回して、他の電光掲示板を見た。其処には、「4：55高尾」と表示されていた。

僕はもう一度見上げる、ハートマークが表示されている。よく見ると、割れたりくつついたりを繰り返している。

僕はもう一度当たりを見回す、人を確認する。丁度僕の周辺には人が居ない。謀った様に。

「まさか」

僕は呟いた。すると、「カタンコトン」と何とも可愛らしい音が聞こえてきた。その音が201系でも、E233系のもので無い事は、鉄道ヲタクでなくて分かる筈だ。

僕は白線の上まで移動して、新宿方面を見た。

カタンコトン

ピンク色の201系だ。

カタンコトン

しかも、少し小さい。

カタンコトン

電動幕式には、「失恋」とポップな書体で書かれている。

カタンコトン

僕の前に止まった。

本当に1両だ。

「ぷしゅー」、とまるで幼稚園児が電車の真似をしているかの様な音が聞こえ、扉が開いた。

そして、

「きちじょじー！きちじょ…ずっ…ふんがー！」

舌つたらずな声が、車掌室から聞こえてきた。

カタン

これまた可愛い音を立てて車掌室の扉が開き、中から出来たのは、

「切符はいけす…はいけふ…ちくしょー！」
ピンク色の髪をした背の小さな車掌さんだった。

「次は…みかた…みかた…」って敵もいるの？！ギャーハハ！」
恐ろしく幼い声を聞いて、昨日聞いたとある女性声優さんがパーソナリティーを勤めるラジオ番組を思い出した。相方の男性声優さんの苦勞と共に。

普段乗っている中央線で、少し一般の方とは違う回路を兼ね備えた様な車内アナウンスが聞こえてきたら、僕は迷わず非常停止ボタンを押すだろう。

さて、僕は座席に座り、冷静に考えていた。

つい5分前までは、吉祥寺駅3番線のホームに立っていた。そこで僕は確かに失恋選書車両なる都市伝説的を確かに求めいたが、正直に言えば1%だって信じていなかった。しかし、電車はホームにやって来た。伝説通りピンク色だった。

「乗るの？乗らないの？」

呆けている僕に、ピンク色の髪をした車掌さん（以後、しゃよしさんと呼ぶ事にする）は服の袖を掴み、電車に乗る様促した。

「あ……はあ……」

僕はちゃんと返事する事も間々ならず、フラフラと車内に入った。
「それじゃあ…しゅっぱつしんさんなめこおー！」

恐らくノリだけで発せられているであろう、しゃよしさんの声が車内スピーカーから聞こえた。

それから5分後が今である。

僕は少し冷静になった頭を携えて、車内を見回した。外見の奇抜さから車内も相当なエキセントリックであると思像していたが、201系と殆ど差異は無かった。201系よりも車両が少し小さい分、高さ幅が少し窮屈に感じる位だ。座席と釣り皮はピンク色だが、そ

れ以外は201系そのものだった。少し以外だったのが、車内広告が無かった事だ。外見と比べると大分閑散としていて、物悲しさが全体を覆っている。失恋専用だからだろうか？

と、ここまで分析した所で、一つ溜息を吐いて頭を倒した。後頭部が車窓のガラスに当たり、ガガンと小さく音が鳴る。視線は反対側座席の棚に置いた辺りで気が付いた。車内アナウンスが流れるスピーカーとは別に、幾つか某有名会社の物が設置されていた。

それに僕が気が付いた瞬間、待ってましたと言わんばかりに、スピーカーから音楽が流れ始めた。優しいピアノの音色である。どこかで聞いた事がある、いやないかな、と逡巡する事なく、流れてきた曲がジャズピアノ二ストのビル・エヴァンスの作品「ピース・ピース」である事が分かった。

ジャズを好んで聴くわけではなかった。「超。この曲にはな魔法があつてな、掛けるだけで空間がシャレオツになるのさ！ガハッ！」とスコッチを飲んで顔をシャア専用ザクの如く真っ赤に染めた親父が、定期的に薦めてくるものだから、馴染み深いものになってしまった。とは言うもの、決してこの曲を聞くのもやぶさかではなく、親父の言う通り確かにこの曲が掛かると、空間に雰囲気が出る。

朝日の光が薄っすらと車内を光に染め、雲が嘘の様に奇麗に浮いている。流れるBGMのピアノの音一つ一つが、僕の胸を締め付けている。

丁度良いじゃないか。失恋したこんな朝には、さ。

フツ、マスター、スコッチを一杯くれよ。

「つぎは〜み〜た〜か〜！み〜か〜…フヘヘヘッ！」

もの思いに耽掛かった瞬間に聞こえたしゃしゃさんのアナウンスで、全てが台無しになった。畜生！

無然とした顔の僕を載せながら、ピンク色の201系は三鷹駅に滑り込んだ。

不思議な事に、どうやらこの車両は人には見えていない様だ。ス

テルス戦闘機が見たら腹の皮が抜れる程笑い悶えるであろう派手な外装をした201系が、目の前を通り過ぎて、ホームに立つ人達は一切此方を見ようとはしない。「何か来た。やばいもんが来た」とピンク色の201系に畏怖して敢えて視線を逸らしている、という様子では無かった。

「本当に見えないんだな」

そう僕が呟いたと同時に、電車はキツと音を立てて停止した。

「みくたくか！みくたくか！」

しゃしよさんの幼子声が聞こえ、扉が開いた。

僕は車両一番前進行方向右側の七人掛けシートの端に座っていたので、何となしに首を右に向け、空いた扉を見た。

誰か乗ってくる、という事を頭の片隅にも置いていなかった僕は、扉から入ってきた、セーラー服を着た色素の薄い青色をした女の子と目線が合った事に心底驚いた。

「ギャーーーーー！」

「キャーーーーー！」

僕は思わず声を上げてしまった。畜生！恥ずかしい！

女の子も負けじと驚いた様で、声を上げ凄い勢いで後ずさり、車掌室のお扉にガンと音を立てて背を付けた。

「ハア……ハア……ハア……」

待て、僕。驚くのはいいが、息を荒立ててどうする？！これじゃまるで変態じゃないか。深呼吸しろ！害が無い事を伝えるんだ！『お嬢さん貴方も失恋されたのですか？一緒に傷を舐めあおうじゃありませんか』、よし！名案！

「スウウ……ハアアハア……舐め合おう……」

「変態！……」

ブン殴られました。

「……痛てて」

僕は殴られた右頬を手で擦り、対角線上に座っている女の子をチ

ラリと見た。

「……………」

シーンという音は聞こえないが、ジーという音が僕の耳には聞こえる。そして、一緒に聞こえてくるBGMは、いつの間にかビル・エヴァンスから陽気なボサノヴァ風の曲に変わっていた。

このまま変態と誤解されたまま、一緒の車両に乗り続けるのは精神衛生上よろしくない。誤解はちゃんと解こう。

「あ」

「喋るなコツチ来んな」

あのと云う間も無く、一刀両断。

若干の腹立ちを覚えながらも、ちゃんと女の子の姿を見た事に気づいた。

色素の薄い青い髪にセーラー服に黒いハイソックス。一見すると、シンクロ率云々の某ロボットアニメの実は大量生産の方、ヒューマノイド云々の宇宙人の方と同じ様な雰囲気醸し出しているが、

「何見てんのよ?!」

本当にあくまでも醸し出しているだけで、どう考えても無口とは程遠い様な鋭い声色であった。アルミホイルで手を切ってしまったかの様な声だ。いや、取り合えず落ち着け僕。話せば分かってくれる筈だ!

「だ…」

「うるさい」

「あの…」

「喋んな」

「だか…」

「こつち見んな」

そうかそうか、喋らせてもらえないですか。

「てめえ…いい加減にしろよ!こちらフラれて気が立ってんだよ?!……………」

三流の悪役が吐く様なセリフを吐いて僕は激昂したが、直ぐ気が付いた。

「…そうか……俺フラレたんだけ……」
自分がフラれた事に。

「……………」

そんな僕を、女の子は訝しげな表情で見ている。悲しげなクラシックギターのフレーズがスピーカーから流れていた。

「超君」

「うん？」

彼女は彼に話し掛けた。

「恋、してみたいと思う？」

「なんだ、やぶからぼうに」

「うゝん…なんとなく。お昼休みにさ、ゆうこと話してたからさ」

「恋ねえ……。しなくてもいいんじゃないか？」

彼は彼女を離し掛けた。

「…なんでそう思うの？」

「恋をしなくたって、好きな人と一緒に居れるだろ？」

「人を好きになるのが、恋なんじゃないかな？」

「だったら俺が松崎の事を好きなのも、恋になるじゃん」

「松崎君は男の子だし、それに友達として好きって事でしょ？……もう、バカ」

彼が彼女にフラれたのは、このやり取りから大分後の事であった。

「ふーん」

僕の隣に座る女の子は両手を頭にやり、10年来の友人の話を聞くかの様な、随分とフランクな態度で呟いた。先程の変態呼ばわりが嘘の様だ。

「キミもふられたの？」

この言葉が発せられたと同時に、変態騒動は実にあっさりと終焉

を迎え、僕は自分が失恋した事、又その経緯を懇切丁寧に説明した。一体何の説明会だと、脳内では不満の声が少なからず上がったが、これは女の子の誤解を説く為でもあり、必要不可欠なのだ！、と少数派の声を諸共せずに、僕は説明した。なぜ自分がフラれた事を、予備校の熱血講師よろしく講義しなければならぬのだ？ いかん、冷静になつたら駄目だ。ああ、虚しい。

ともあれ、変態という誤解は解け、晴れて一介の男子高校生に舞い戻った僕は、隣に座り今聞かせた話しを、脳内で租借し考えているであろう女の子を見ていた。

む、なんだこの子、かかか、かわいいじゃないか。『フラれたばかりなのに不謹慎であります！』、脳内軍曹がそう進言してくる。人間は何時だつてお腹が空くものなのだよ。

「かわいそう」

「え？」

僕が下らない事を考えていると、女の子が何か言葉を発した。このタイミングで喋ると思っていなかったので、僕は完全に聞き逃した。

「なんでもない！」

女の子は右親指を立て、グツと此方に向ける。その表情は、厄が抜けたように晴れやかな顔だ。根拠は無いが、そう思った。

「ところでさ、君の苗字何？」

「名前じゃないんだ！」

思わずツツコンでしまった。

「そうそう、名前だった」

へへと無邪気な笑みを女の子は浮べる。

本当に見た目とは全く違う、とても快活な少女。そんな印象に違和感を覚えてしまうのは、失礼だと思った。

「見た目と中身が違うと思ったでしょ？」

う。顔に出ってしまったか。不覚。

「いいのいいの。そんな顔しないで」

女の子は本当に全く気にしていないという様子で、手を軽く振った。

「そんな私の名前は、現在ココ！よろしくね」

「げんざいここ??」

「アクセントが違う。幻海師範の幻海に、ココナッツのココを合わせて、現在ココ！」

「むさゝしかさゝい！むさゝしかさゝい！」

快活で不可思議な女の子現在ココの説明に、スピーカーから聞こえるしゃしゃさんの声。ちなみに武蔵境ですよ。何やら混沌とした雰囲気的車内を覆い始めた。

「ココって遠慮無く呼び捨てで呼んでね！」

「う、うん。わかった」

快活な子に弱い僕は、たじろきながら、開いた扉の方をチラリと見た。また誰か乗ってくるのではないかと、内心冷や冷やしていた。僕の隣に居るココとやっと自己紹介をし終わり、これから色々話すって時に、新たな登場人物が現れてしまったら、たまったもんじゃない。僕が持つスペックは低いのだ。なんだか悲しい。

しかし、開いた扉全てを二人で見たが、どうやら人が乗ってくる気配は無さそうだ。

「人は乗ってこなさそうだね」

「そうだね……って人は？！人以外なら乗ってくるの?！」

この車両にあのしゃしゃさんだ。有り得るぞ！僕は身を固くした。

「冗談だつてば。超さん変な人」

「ぐっ」

指摘されてしまった。しかも、さん呼ばわりですか。

「扉が閉まりまゝす！気を付けてくらさゝい！」

しゃしゃさんの拙い声が聞こえ、扉が閉まる。

結局、人は乗って来なかった。そして、電車は動き出した。

「で、ココはなんでこの電車に乗ったの？」

「……」

ココの顔が一瞬にして曇る。バカか！僕は！失恋専用車両に乗って来た人に何て質問してるんだ？！銭湯に来た人に、「貴方は何故此処に来たのですか？」と質問しているのと変わらないじゃないか

「超さんはデリカシーが欠如しているね」

摂氏マイナス273度の声色が、僕の心に突き刺さる。その通りで御座います！

ちなみに脳内の下町親父も、「てやんでえ！銭湯に来たんだから湯に浸かりに来たに決まってるだろ！」、と声を荒げています。ごめんなさい。

「…反省します」

「まあいいよ」

何と出来た御方！一生着いて行きます！

「私も超さんと一緒」

「え？」

僕が脳内で恭順の意を示していると、ココははにかみ呟いた。

「フラれた事が一緒なの？」などと聞いてしまう程、僕もそこまで野暮ではない。

「私も幼馴染にフラれちゃってさ」

テへと舌を出したココだが、反則的にかわいい。と思った所で僕は自分の男子高校生たる感情に自重を掛け、無言でその言葉を受け止めた。

「悲しかったなあ…。今も悲しいなあ…」

快活から訥々へ。現在ココ。そんな選挙ポスターよろしく、ココは話し始めた。

しかし、一瞬だけ浮べた表情があまりにも物悲しかったので、無理に話す必要は無いと僕は言ったのだが、「超さんは話して私が話さない。それじゃあ不公平だよ」とココは自分を戒めるかの様に眉をひそめ、腕を組んだ。不公平とは言わないが、有り体に言えば興味はあった。人の失恋話に興味という感情を抱く自分に、えらく嫌

悪しそうになるが、厚情を掛ける程の付き合いではないし、致し方が無い事なのかもしれない。などと、随分と冷たい事を考える自分に自己嫌悪。 あーあ。

「ずっと一緒に居たからさ、二つ返事でOKしてくれるかと思ったんだ」

ココの目は何処か遠くに行っていた。放つ声は、失恋の痛みを存分に醸し出していた。

それからココはゆっくりと話してくれた。幼馴染とは生まれた病院も一緒に、家も隣で、幼稚園、小学生、中学校、今現在通っている高校も一緒なのだと。

「情性と一緒に居るわけじゃないし、本当に好きなの」

途中、僕の目を見て力強く放った言葉に、一瞬だけ心の奥底が揺れた。僕だって、情性と一緒に居るわけじゃない。決して。ただ違和感があった。

一通り話し終えたココは、立ち上がり僕の方を見た。

「でもね！私分かっちゃったんだ」

舌をペロリと出すココ。

「何が？」

「ヒ・ミ・ツ！」

人差し指を立て、僕の唇に当てる。不覚にも心臓が一瞬締め付けられる。なんと女性に免疫が無いのだろうか。畜生。

「あゝ！話したら茜に会いたくなってきたゝ！」

「茜？友達の名前？」

「違うよゝ！幼馴染の名前だよ」

ココはうんと小さく声を上げながら伸びをする。セーラー服とスカートの間に発生する絶対領域から、白い肌と綺麗なへそが僕の視界に飛び込んできた。だからどうした。ただそれだけの事じゃないか。落ち着け。ハアハア。

「全然落ち着いてない！」

「どしたの？超君？」

頭を抱える僕を見て、心配そうに顔を覗いてくるココ。すんません！

「い、いや、何でもない」

「そう？ならいいんだけど」

「でも、あれだね。茜って随分女の子らしい名前だね」

「え？女の子だよ？」

女の子だよ。女の子だよ。女の子だよ。……。ココの言葉にディレイが掛かる。

ふむ。するってえつとあれかい。ココさん、お前さんは序女性なのに女性が好きて事なのかい？百合か、百合の花か。そうかそうか。此処は一つ、冷静に対応しよう。

「えーーーーーーー?!」

無理でした。

1 車両目（後書き）

最後まで読んで頂き、有り難う御座います。
話は続きます。

続きを上げるのは、まだ先になりますが、必ず完結させたいです。

空気 田

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4196o/>

失恋専用車両1

2010年10月20日19時55分発行